

形

forme

「特集」
日常と芸術と教育



本資料は、「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

日文

検索



FORME AND VISION

No.01

円、丸、点

『みる』は漢字で『目』の下に人を表す『儿』と書いて『見』です。何が単に瞳に映り込んでいる状態ではなく、目を通じて意識的にまたは無意識に知覚し、何かしらの理解をすることを意味します。人は目覚め、目を開いている間、目には相当量の視覚情報が飛び込んできます。単純に目に映るものを全てを同等に受け入れるのではなく、必要とするまたは印象の強いものが脳の機能によって選別され、その対象がこう見える、こうだと思われると理解します。

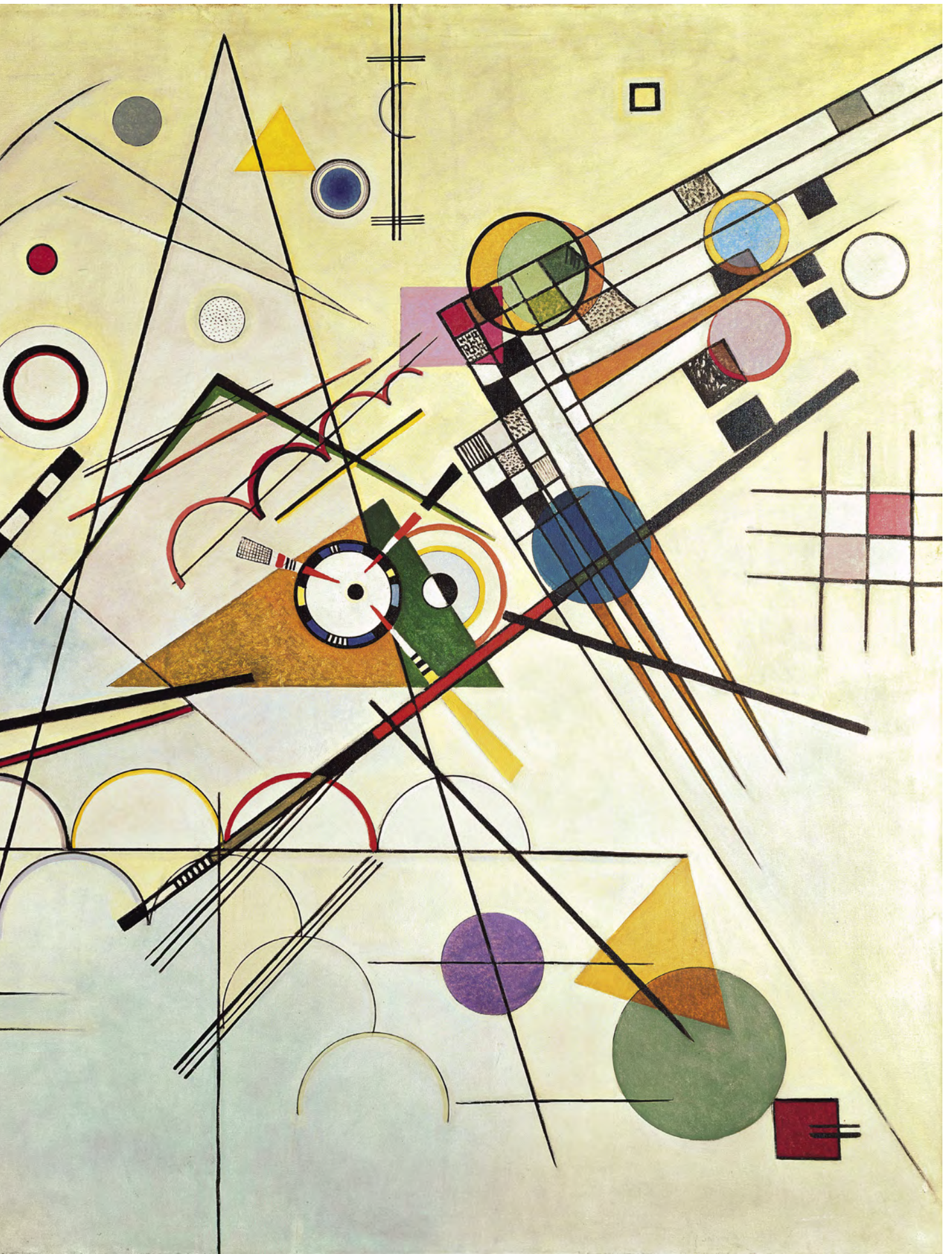
ここではその『形の認知』に焦点を当て、ミニマルな表現の図で探っていきます。

今回の図は全て○を黒で塗りつぶした同じ形●の大きさの違うものです。大きさによって円、丸、点と異なった理解になります。目を近づける（または遠ざける）ことでその理解も変わってきます。また、線の上に配置することで、大きい●は転がって行くように見え、動的な機能を持ちますが、小さくなるほどピリオドのような止める点として逆の機能を持ちます。同じ形でも大きさが変わる事で伝わる意味が大きく違ってきます。

山本和久 Donny Grafiks
グラフィック・デザイナー 多摩美術大学グラフィック
デザイン科卒 「目でわかる、目で感じる」を最小
限の表現で最大限伝えるグラフィックをコンセプトに
活動。 www.donnygrafiks.com

白線を踏み外さないように 冬

高遠朱音





対立と矛盾—これが、われわれのハーモニーなのだ。こうしたハーモニーにもとづくコンポジションが色彩とデッサンの結合であることは、いうまでもない。

—ヴァシリー・カンディンスキー



video: Takaumi Furuhashi (WAKE UP!)



AR

左ページで紹介しているアプリを使って、
 誌面にかざすとARコンテンツが起動します。



左ページで紹介しているアプリを使って、
 誌面にかざすとARコンテンツが起動します。



photo: Kazue Kawase(YUKAI)

形
forme

No. 311

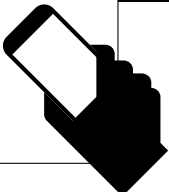
cover photo: Maki Arimoto

art direction and design: Kazuhisa Yamamoto (Donny Grafiks)

目次

- 02 **FORME AND VISION** No.01 [円、丸、点] 山本和久
- 06 **エウレカ** vol.1 雲 video: 古橋太海
- 08 **特集** **日常と芸術と教育** 石上城行 北川フラム
- 18 **先ず見る** 第14回 かたち、かんがえる 成相肇
- 20 **学びのフロンティア** 小学校向き わたしの大切な「いつもの場所」 服部真也
- 22 **学びのフロンティア** 中学校向き アニメーションでつなぐ心の輪 森元勇氣
- 24 **そぞろみ部** その三 城 文:市川寛也 イラスト:danny
- 26 **創造のつばさを広げて** Vol.2 こども美術館 スカイミュージアムの取組み
- 28 **場の設定** 絵を描く場づくり編 文:名達英詔 イラスト:Luis Mendo
- 29 **1/126,940,088** 新井卓 文・写真:田野隆太郎
- 33 **ラフスケッチ**
- 34 **研鑽** 会津造形サークル みしらず会

形
forme



スマートフォンやタブレットをかざすと動画が楽しめる!

「カザスマート」アプリを Google play、App Store でダウンロードしてください。
マークのある誌面全体にかざすと、動画を見ることができます。



特集

日常と芸術と教育

現代アートの国際芸術祭は、今や日本各地で数多く見られます。今年は、瀬戸内国際芸術祭やあいちトリエンナーレのほか、初めて開催される芸術祭も登場。埼玉県さいたま市では、初めてとなる、さいたまトリエンナーレ2016が開催されました。様々なテーマをかけた地域と連携しながら行われる芸術祭では、今まさに進行している美術を体感することができるのです。

アクティブ・ラーニングを生む 国際芸術祭の魅力

近年各地で「〇〇トリエンナーレ」「〇〇ビエンナーレ」と呼ばれる国際芸術祭が数多く開催されています。一般的にトリエンナーレやビエンナーレでは人々の生活や歴史そして地域などをテーマとする現代アートの作品が多く展示されていて、来場者はただ単に鑑賞するだけでなく、併せて実施されるワークショップなどに参加し体験することも求められることがあります。現在さいたま市で開催している「さいたまトリエンナーレ2016」においても、内外から多くのアーティストが招聘され、作品展示に併せて様々な取り組みを展開しています。今回のトリエンナーレにホームベース・プロジェクトとして参加しているアーティストのアナット・リトウィン（アメリカ/イスラエル）とマシャ・ズスマン（ウクライナ/イスラエル）^{※1}は、埼玉県立近代美術館で行っている教育普及事業「MOMASの扉」^{※2}のゲスト講師として子どもたちを対象とするワークショップを実施することになりました。

美術館の創作室に集まった子どもたちに対してアナットはまず「ホーム（心地よい場所）」と「ハウス（自分の暮らす場所）」の違いについて問いかけました。そして、その心地よい場所である「ホーム」へ至る道のりを画用紙に線で描くように指示し、その途中にある目印を五つ、記憶を巡らせながら描くように付け加えました。次に彼女は「ナビゲーションキット」をつくらうと提案しました。ナビゲーションキットとは、先ほど描いた道のりの線をもとに厚紙を割りピンでつなげてつくる、定規のような「メジャー・ステイク」と、五つの目印について詳細を記すための冊子「ジャーナル」、最後に画用紙を丸めてつくる「テレスコープ」となります。子どもたちはアーティストや学生ボランティアとおしゃべりをしながら思い思いにキットの制作を進めていきました。

ほとんどの子どもがキットをつくり終えた頃合いを見計らってアナットは、三つのキットを入れるためのビニールバッグを配りながら「このバッグは今つくっているキットを入れるためのバッグよ。」と説明し、バッグの中には小さな虫眼鏡が入っているの、それを取り出して創作室の前に集まるように声をかけました。子どもたちが集まったところでアナットは、本物のさいたま市の地図を取り出して「ハウス（自分の暮らす場所）」を探すように指示しました。子どもたちは虫眼鏡を使って懸命に自分の暮らしている場所

日本各地で開催されるアートイベントにおいては、鑑賞のみならず「体験する」ことがキーワードとなっています。作品に能動的にかかわることで、子どもたちそれぞれの見方・考え方が広がっていきます。



を探し始めます。それぞれの「ハウス」を見つけた子どもは、配られたバッグに虫眼鏡と三つのキットを丁寧にしましながら満足そうにしています。まるで小さな冒険旅行から戻って来たみたいですね。最後にアナットから自分たちも「ホーム」をテーマとして作品制作しているのを、完成したらぜひ見に来てほしいと告げられワークシヨップは終了となりました。

さて今回のワークシヨップで子どもたちに一体何が起こっていたのでしょうか？ アナットは、ホームへ至る道の目印を描くときに記憶を巡らせるよう指示していました。子どもたちは、モノを見ながら描くのではないとわかると途端にのびのびと描き始めました。それぞれのキットづくりも特に具体的な機能を果たす道具ではないので、楽しく取り組むことができたようです。つまり子どもたちは、必要以上の制約を感じることなく、驚くほど自由にイメージシヨンの世界を膨らませていったのです。そして、リアルな地図が出てきたときに一気に現実の世界へ引き戻されましたが、このことによつて子どもたちの心の中で、イメージシヨンの世界とリアルな世界がつながりました。まさにこの瞬間に、ワークシヨップのテーマである、それぞれにとつての「ホーム」について思いを巡らすきっかけが生じたのだと考えられるのです。確かに全ての子どもが深く思いを巡らしたとは言えないかもしれませんが、それぞれのレベルでテーマと向き合っていたことは間違いない

でしょう。

このように現代美術に携わるアーティストの作品やワークシヨップは、唯一の答えにたどり着くのではなく、それぞれの立場やレベルに応じてテーマについて考えさせるようなアプローチを取ります。そのため来場者やワークシヨップの参加者は、自然と能動的にかかわるようになり、主体的な思考力が育まれていくのです。このような現象は、アートを通じた「アクティブ・ラーニング」ということができるかもしれない。

「さいたまトリエンナーレ2016」ではこの他にも、多様なアーティストによる作品やワークシヨップなどの取り組みを展開しています。次項ではいくつかの作品を取り上げながらその魅力を読み解くとともに、子どもたちの鑑賞や表現活動のなかで活用する場合のポイントについてお話ししていきたいと思ひます。

石上城行 いわがみ・しるゆき

一九六八年東京都生まれ。埼玉大学准教授。東京藝術大学卒業。島根大学などで教鞭を取り、二〇〇九年より現職。美術館や地域社会と連携したアートプロジェクトやワークシヨップを数多く手がける。さいたまトリエンナーレ2016実行委員。

※1 アナット・リトウィン マシヤ・ブスマン
本トリエンナーレの企画「ホームベース・プロジェクト（国際的移動型滞在創作活動）」に参加しているアーティスト。滞在先の空き家を「ホーム」と見立てて、リサーチを含む創作活動を展開することで、芸術の役割を發展させることを目的としている。アナット・リトウィンはその発案者。

※2 MOMASの扉 埼玉県立近代美術館が実施している子ども向け教育普及事業。毎週土曜日の午後には多様なプログラムを展開している。実施他体制としては教育担当の美術館職員を中心に、埼玉大学の学生が地域連携授業（ミュージアムコラボレーション）の一環として指導補助に携わっている。



子どもの鑑賞のコツ・表現のヒント

この作品にはカラフルな日用品が使用されていて、まるでお祭りの飾りの様にも見えます。身近なものでも、選んでつなぎ合わせると、もともとしていた意味や機能が失われて美しさだけが際立ってきます。並べ替えや練り

返しによって、造形的な強度や魅力も増します。美しさは、巧みやセンスということでなく、実はどこにでもあつて、ちよつとしたきつかけでいつでもだれでも生み出すことができる。それが発見できる活動になるでしょう。

参加者に自由につくってもらった矢印には、無意識のうちに個人的な事情がにじみ出ています。さらに撮影し並列化することでそれぞれの事情が際立ち、個性が見えてきます。そういう意味では、自我形成期の中学生にとって

いい形で自分を知ることができる表現になるかと思えます。普段はすごく装っていても、コロッと素の自分が出てしまう…。生徒自身で、ああそうか、という気付きになれば、楽しい美術活動になるかと思えます。



表現の
ヒント

造形の美しさは身近にあることを実感できる作品

ハッピーハッピー

チェ・ジョンファ [1961 ~]

世界各国で市民とともにつくられてきた作品シリーズ。プラスチックの日用品をつなぎあわせてつくられた約100本の作品は、ワークショップの参加者によって制作された。



表現の
ヒント

素の自分がにじみ出る楽しい気付きの題材に

←

長島確+やじるしのチーム (長島確 [1969 ~])

誰もが参加できるプロジェクト。参加者にさいたまトリエンナーレ会場の方向を示す矢印を思い思いにつくってもらい、制作チームが写真に収めて展示する。写真は家族で参加した例。



この作品は、他者から自分たちがどのように思われているかを気がつくことができる作品です。そして、表現のフックがたくさんあり、その一つひとつに様々な意図があるので、対話型鑑賞を行う作品として非常に理想的です。形や色への気付きから始まり、作品を見てどう思ったのか、どういうイメージかを聞いていくと、ほどなく主題に近いキーワードが出てくるはずですが、小学校の高学年から十分できるのではないのでしょうか。



金色に塗られた顔や、体中にまとわりつく虫など、子どもたちが興味を抱きやすい表現が随所にw。

鑑賞のコツ

“フック”の多い作品は対話型鑑賞に最適

さいたまビジネスマン

アイガルス・ビクシェ [1969 ~]

涅槃仏から着想を得て、現代の生活を支える企業戦士のしばしの休息の姿を表す。ゆっくりと寝ころんで、自分の幸せを考えてほしいとのメッセージが込められている。全長は 9.6 メートル。



ここで着目したいのは、「どう伝えるかの工夫」というデザイン的な視点です。架空の歴史を表現していますが、埼玉県の歴史的背景を調べているでしょうし、展示物の埴輪も、本物をよく理解した上で制作されているのがわかります。その上でよりリアリティが出るような見せ方、伝え方をしているのです。「展示する」「展覧会をつくる」といった活動におけるヒントになります。



「出土品」の展示風景。細部にまでこだわってつくられているのがわかる。

表現のヒント

伝え方・見せ方の工夫がよくわかる展示やデザインの参考に

犀の角がもう少し長ければ歴史は変わっていたらう

川楚龍三 [1976 ~]

埼玉県内から多く出土されている埴輪から着想。現在我々が存在している世界「さいたま A」の並行世界「さいたま B」での調査活動で発掘された埴輪群を視覚化した歴史改変 SF 美術作品。

この作品には、作者自身も無意識に感じていたことが手紙によって表現されていると思います。自分宛に出した手紙が、送った時と少し時を経て戻ってきた時では、意味が変わっています。それは送った手紙が変わったのではなく、送った側が変わったためなのです。子どもであれば、一学期に出した手紙を二学期の終わりに戻すだけで、その変化に驚かされると思います。子どもにとっては成長へのリアリティを獲得するいい機会となるでしょう。



刺しゅうによって宛名が描かれた手紙は、ひと針ひと針に記憶や日常が深く刻み込まれる。

鑑賞の
コツ

自分宛の手紙によって成長や変化を実感する

栗

秋山さやか [1971 ~]

作者が約4ヶ月間さいたま市内に滞在し、日々自分に向けてつづり、投函した手紙が会場を埋め尽くす。記憶が紡ぎだされ可視化されたインスタレーション。

野口さんの作品には少しユーモアがあり、作者のもの見方や眼差しが写り込んでいるような親しみやすさがあります。写真は今後、教育のIT化が進めばますますポピュラーな表現方法になります。そのためにはまず、構図、色彩など写真を見る力を養うことが重要です。特に写真は目の前の風景をどのように切り取るかで、その意味が変わります。そこに作者の意図が介入し、オリジナリティが生じるのです。

はじめのことは

野口里佳 [1971 ~]

埼玉県出身の作者が、作家となって初めて故郷を取材。写真のみならず映像も交えた作品を制作した。いつも見ているのに当たり前すぎて気付かない美しさを撮ることに挑戦し、今いる世界の豊かさを表現した。



鑑賞の
コツ

構図の取り方で意味が変わる写真ならではの表現方法

さいたまトリエンナーレ2016

●期間: ~12月11日(日) 水曜定休 ●主な開催エリア: 与野本町駅~大宮駅周辺 武蔵浦和駅~中浦和駅周辺 岩槻駅周辺

●主催: さいたまトリエンナーレ実行委員会 ●ディレクター: 芹沢高志(P3 art and environment統括ディレクター) ●URL: <http://saitamatriennale.jp/>

国際芸術祭には、どのような学びがあるのでしょうか。
私たち子どもたちに、どのようなかわりも
もたらされるのでしょうか。
「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」や
「瀬戸内国際芸術祭」で総合ディレクターを務める
北川フラム氏に芸術祭のお話、
学校教育への取り入れ方のヒントを伺いました。

Photo: Tada (YUKAI) P.14 Text: Eiichi Hosokawa (ART DIVER)

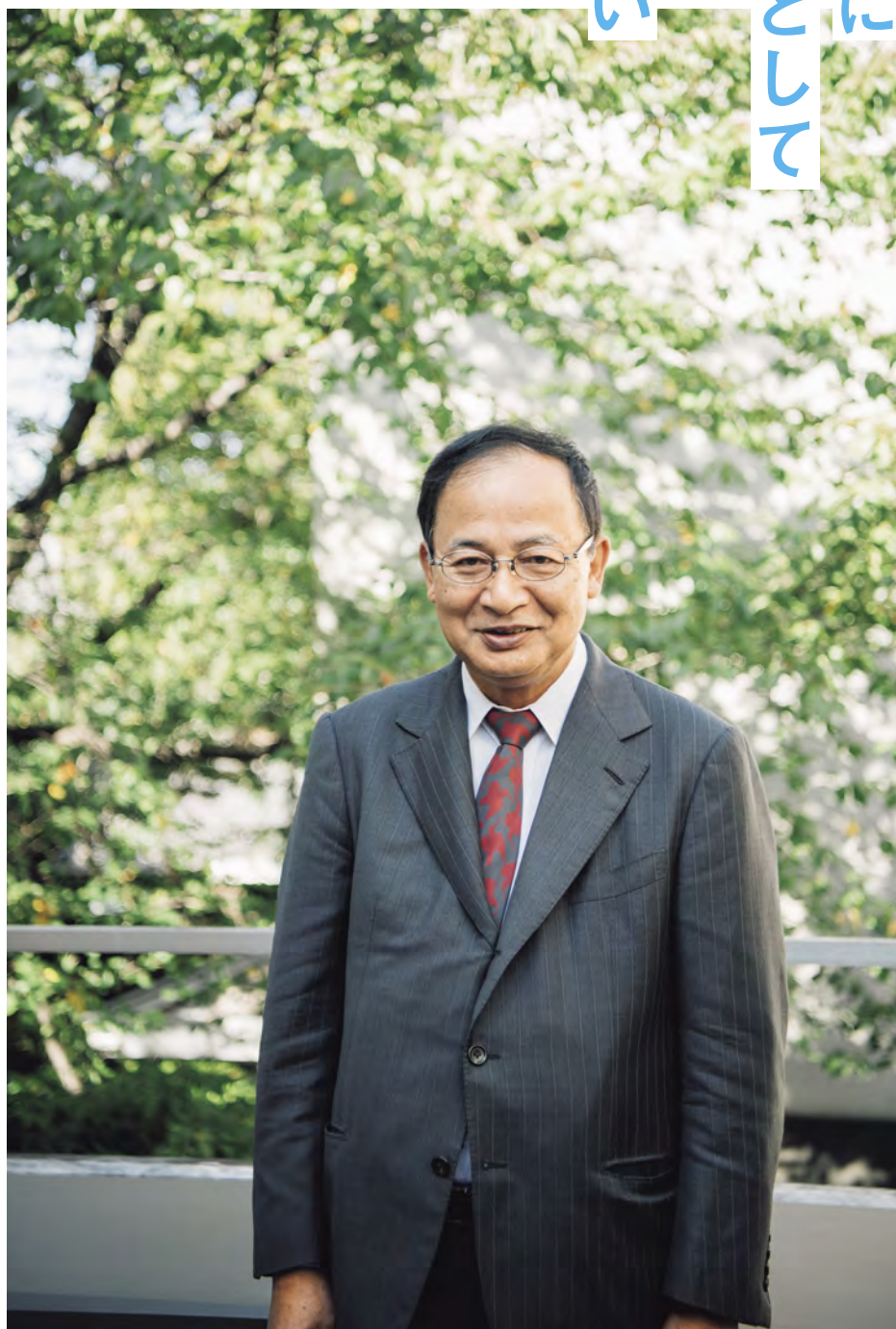
変容する美術に 触れられる場として 芸術祭を 活用してほしい

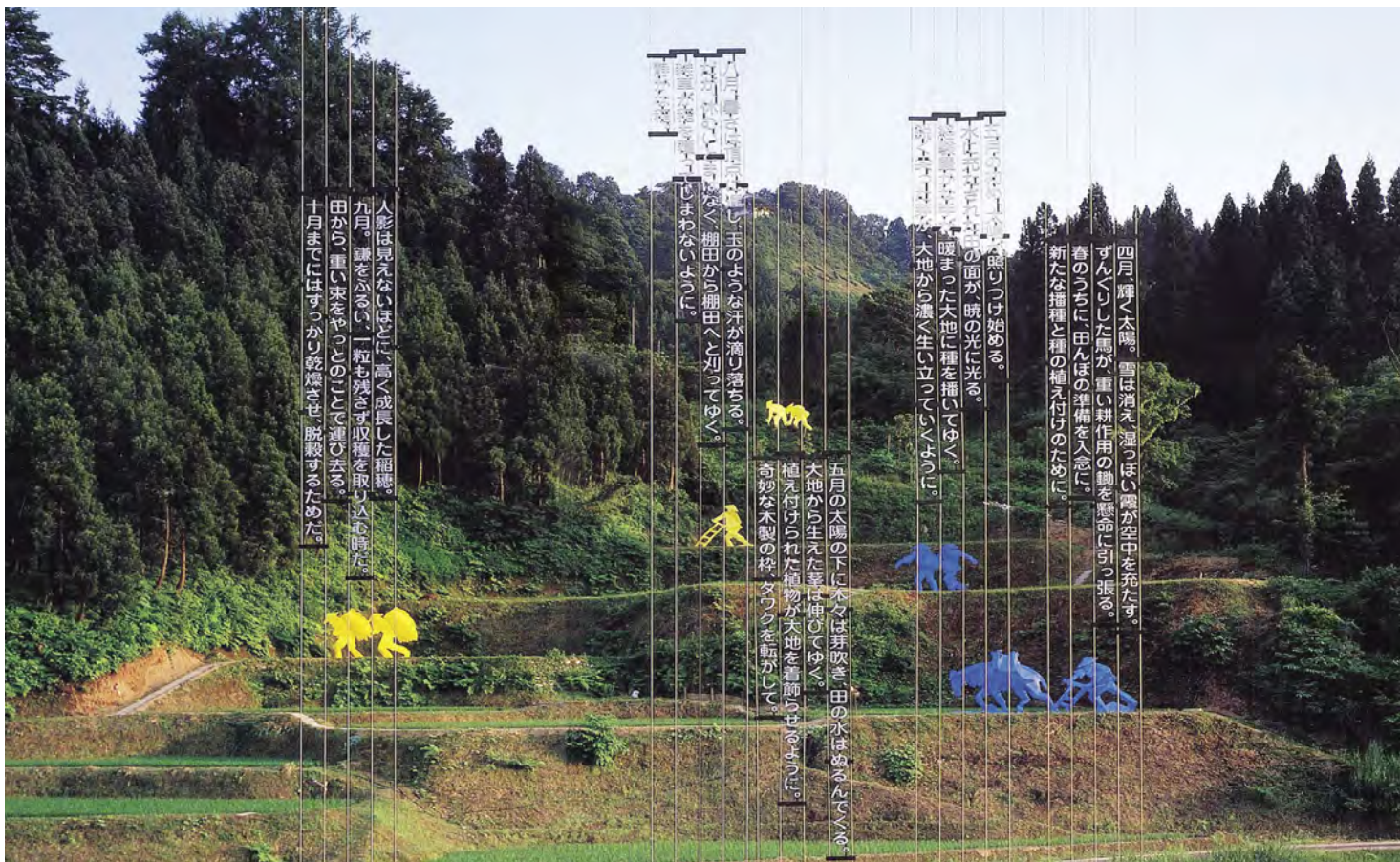
美術は美術館から屋外へ

ここ数年、芸術祭が盛んです。大小を問わないならば、美術を中心とした地域づくりは全国で二千ほどあるとも言われています。その是非を問う議論もありますが、私はこの状況を好ましいものだと思います。国や自治

体の公金の使い道として、美術は何の役にも立ちませんが、その一方で害もない（笑）。その予算規模も、防衛費などと比べれば微々たるものです。このような少ない予算で、しかも越後妻有や瀬戸内といったアクセスの悪い場所での開催にもかかわらず、観客は面白がって繰り返し来ている。それは

なぜでしょうか。
私は、欧米中心型であった美術史の書き換えが始まったからだと思っています。フランス革命から始まる近代以降の美術は、欧米が主導権をにぎってきました。そして、美術品は、建築家ミース・ファン・デル・ローエが提示した「均質な空間」、つまり美術館





棚田 2000 イリヤ&エミリア・カバコフ [1933 ~ / 1945 ~] photo: ANZAI

やギャラリーのホワイトキューブで展示され、世界中どこでも均質に見えることが重要視されたのです。

しかし、近代化を推し進めた結果が今の状況です。地球環境は完全に手遅れになり、資本主義は現実性を失ってどうしていいかわからない。こうした近代のさまざまな問題とともに、美術のあり方にも疑問が生じてきています。改めて美術とは何かが問われているのです。アルタミラやラスコー洞窟壁画以来、世界中で美術の営みは連綿と続いていますが、「美術とは、自然と人間の関係を表す技術」だという本質に立ち返るべきなのです。

歴史的には、採集経済から始まり、農業が起り、そして近代化の後にグローバル社会が訪れるという見方ができます。しかし、現実是一本道ではなく、越後妻有や瀬戸内地域には、そうした文明の諸層がまだら模様に残っているのです。そういう中に優れたアーティストが入って、何を見つけ、自然や社会との関係をどのように表現するのか。それが面白いから多くのファンがはるばるやってくる。こうした表現は決してホワイトキューブでは生まれません。

「瀬戸内国際芸術祭」の男木島では、会田誠や松蔭浩之、パルコキノシタらによる昭和40年会という作家グループが滞在制作をしながら、常識はずれともいえるめちゃくちゃな展示をしていました。そこに男木島の出身者である家族が遊びに来たそうです。一週間ほど通っているうちに、子どもたちはよ

ほど楽しかったのでしょうか、お父さんにお願いで男木島に移住してしまっただけです。子どもが島に住むことになったので高松市は廃校になっていった学校を再開しました。これは従来の美術の枠組みでは決して起こりえない画期的な出来事でした。

学校を再び地域の中心に

越後妻有の農業は非常に厳しい環境の中で行われてきました。度重なる水害や豪雪に加え、平らな土地がないという制約もある。一体どうやって道を切り拓き、棚田をつくっていったのか。そうしたところに焦点を当てて作品をつくるアーティストもいます。あるいは、採集経済や縄文時代的な文明をリ



鉢&田島征三 絵本と木の美の美術館 2009 ~ 田島征三 [1940 ~] photo: Shigeru Akimoto

サーチする人、圧倒的な過疎をテーマに増えていく廃校を舞台に作品をつくる人など、広い地域の中で多様な作品が次々と生まれました。

ここでは地域における学校の役割についてお話ししたいと思います。それは「学校とは地域の灯台である」ということ。かつて日本ではお寺が地域の人々を結ぶ場でありました。欧米なら教会がそれにあたるでしょう。お寺の役割はやがて学校へと受け継がれます。そこには子どもが集い、季節の節目ごとにイベントがあつて、人が集うキーステーションとして機能していたのです。しかし、過疎化は地域から学校を奪います。物理的に学校がなくなってしまうと、地域の心の寄り場がなくなってしまいます。ですから、キーステーションとしての機能を失った廃校をいかに回復させるかは芸術祭のひとつの課題でした。

初期から廃校を使ったプロジェクトを重ねてきましたが、とりわけ人気があるのが旧真田小学校を使った「鉢&田島征三 絵本と木の実の美術館」です。田島征三さんは著名な絵本作家で、校舍全体を使って立体絵本をつくり上げました。絵本のストーリーは、廃校で他校に移った最後の在校生であるユウキ、ユカ、ケンタの三人が学校に戻ってくる時、そこに住み着くお化けが学校の思い出を吐き出して学校がよみかえるというものです。校舎中には、物語世界が現実には現れたかのように、さまざまな立体物で埋め尽くされています。制作を卒業生たちが手伝い、会期

中にはコンサートなどのイベントが開催され、会期終了後の今現在も日々多くの人が集う場所になっています。

また、旧奴奈川小学校を舞台に新しい学校「奴奈川キャンパス」も、大地の芸術祭の代表的な活動のひとつです。ここは、多様な人々と食・生活・遊び・踊りを学びながら、先人が残してくれた田んぼをできるだけ引き受け、おいしいお米をつくる学校です。私は学生のころ、主要五科目が嫌いだったので(笑)、「奴奈川キャンパス」で教えるのは、美術、音楽、体育、家庭科が中心です。「珍しいキノコ舞踊団」を先生にダンスを習ったり、監督やトレーナーをしつかりとつけた女子サッカーチームをつくったりと多彩な活動を行っています。芸術祭の会期だけでなく、年間を通じて、地域のことや音楽で遊べる場所となっているのです。

美術を遊んでほしい

「奴奈川キャンパス」では、「遊ぶ」ということを重要視しています。実利に直結しない「遊び」は、無意味なことと思われがちですが、実はそこで得られるものは大きい。赤ん坊が「遊び」のなかでたった二年間のうちに言葉を覚えてしまうのに対し、私たちは六年間英語を「学ん」でも言葉を習得することはできません。 「遊び」のなかには、たくさんさんの情報が詰まっている証左です。

学校で学べることのなかで、美術ほど「遊び」に直結するものはありません

ん。私たちが子どもの頃は、美術の時間はとても自由で、遊べる時間だと喜んだものです。その他の多くの科目はひとつの正解を出すことをよしとするのが通常です。でも私は、小学校三、四年生で算数につまづく方がまともだと思っんですよ(笑)。学校では「四分の一足す四分の一は二分の一」と教



ハッピーバカキノコダンス in 奴奈川キャンパス 2015 珍しいキノコ舞踊団 photo: Hiroshi Hatori

とはとても窮屈です。

私は、美術とは今生きている七十三億の人の生理のあらわれだと考えています。だから、美術は「人と異なっていることが許される」という思想的基盤の上に立っている。その意味で、美術はもはや美術館だけで見られるものではなく、誰からから一方的に教わるものではなく、誰からも教育制度の現状を見ていると、地方の芸術祭に美術の授業で行くことは難しいかもしれません。でも、遠足の時間を使って来る学校もありますし、芸術祭に参加したいという要望も非常に多い。重要なのは、美術とのかかわりかたです。「遊び」は、主体的に楽しんで取り組めば「遊ぶ」となり、豊かな人生を送るために不可欠なことを教えてくれます。美術のあり方が大きく変わってきた今だからこそ、美術を介して、先生にも生徒にも遊ぶように学んでもらいたいと思います。

北川フラム

きたがわ・ふらむ

一九四六年新潟県生まれ。アトディレクター、東京藝術大学卒業。「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」「瀬戸内国際芸術祭」などの総合ディレクターを務める。主な著書に『美術は地域をひらく 大地の芸術祭10の思想』（現代企画室）、「ひらく美術」（筑摩書房）、「直島から瀬戸内国際芸術祭へー美術が地域を変えたー」（福武 総一郎共著／現代企画室）ほか。二〇一七年には「北アルプス国際芸術祭2017」（長野県大町市／六月四日～七月三十日）、「奥能登国際芸術祭2017」（石川県珠洲市／九月三日～十月二十二日）で総合ディレクターを務める。

先 ず 見 る
之 凡 目 凡
第 十 四 回

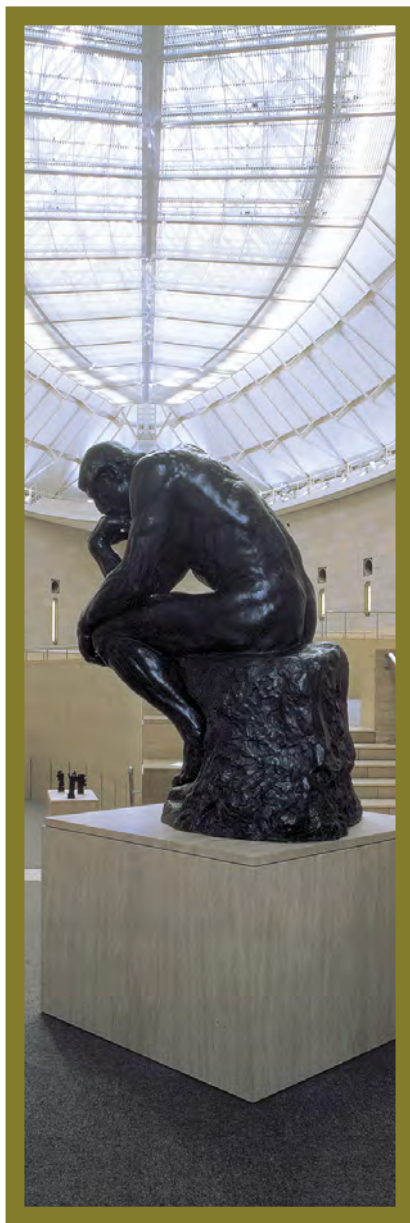
かたが、かんがえる

寒鴉かんあとは冬のカラスのこと。厳しい季節にあつてなお超然としたその姿の、なんと気高いことでしょう。作者の「画鬼」こと河鍋曉斎かわなべきょうさいが、この作品に法外な値段をつけた逸話は有名です。「カラス一匹には高すぎる」とからかう周囲に、曉斎は「カラスに対してではない、長年の修行に対する値段なのだ！」とうそぶいたといえます。たしかにこの絵の凄味は、ダイナミックな枝ぶり、精妙に折り重ねられた墨の複数の濃淡と筆さばき、そして塗り残された地の色の効果（目や羽の中にもご注目）、それらの技術の粋が、最終的に枯木と寒鴉の図にびたつと着地している華麗なアクロバットにちがいません。

曉斎の言葉を受けて、冒頭の感想をちよつと訂正しましょう——カラスが気高いの、と。もし画家がそんなことを言い放つたら、傲慢に聞こえるでしょうか？けれど、結果としての図ではなく、その図を成立させている構造こそが価値をもつ、という曉斎の言葉の主意は、不遜どころかとても本質的です。

本質的ならば別の作品にも応用できる。このカラスが話題を呼んでいたまさにそのころ、はるか遠くフランスで生まれた、あの作品に当てはめてみましょう。ロダンの「考える人」とても有名ですが、「考えている人を象った彫刻」と見るだけでは今ひとつおもしろさが伝





わりにくい作品です。そこで晁斎の言い方の
出番。すなわち、考えている人の形をしてい
るのではない、形が考えているのだ！

この作品は今や「考えるポーズ」の定型の
ようになっていますが、思えばそんなポーズ
に決まった形はないわけです。考える、とい
う頭の中の動きを、今まさに考えている、と
いう動きとして、どのように形で示せばよい
のか。見えない感覚や感情の形象化は芸術の
ミッションのひとつですが、それに対するロ
ダンの回答こそ、形に考えさせる、というも
のであった、とぼくは思うのです。

この彫像の見応えは、特に背中筋の複
雑な隆起です。まるでグシャツと丸めた紙の
ように、ふくらみを保ちつつ固く凝縮してい
ます。そう、頭の中の意識が一点に向かって
じわじわと集中して固まっていく、そのよう
な圧力を伴った、目には見えないけれどもた
しかに感じられる一連の動きが、形に宿って
いるようではありませんか。図よりも構造が、
語っている。形が考えている、そう見えるで
しょう？

うる覚えでこの「考える人」を真似して、
人はよく足を組みます。本当は膝を合わせて
いるのですが、組みたくなる気持ちはわかり
ます。その方が、体が小さくなるから、です
よね。「考える人」のかたち全体が訴えてくる
ギョツと縮まった印象を、つまりロダンが形
象化した考える感覚の動きを、足を組むこと
でなぞったのです。組んだ足の形の中に、ロ
ダンを呼び出した、というわけでしょう。

成相肇 なりあい・はじめ
東京ステーションギャラリー学芸員。一九七九年生まれ。
府中市美術館学芸員を経て、二〇一二年から現職。主な企
画展に「石子順造的世界」、「デイスカパー、デイスカパー・
ジャパン」など。

考える人 [ブロンズ/183×130×110cm] 1881-82 (原型制作) 1903 (拡大) 静岡県立美術館蔵
オーギュスト・ロダン [1840～1917]

授業実践

学びのフロンティア

小学校5・6年向き

わたしの大切な「いつもの場所」

じつとみつけてみると

奈良女子大学附属小学校 服部真也

題材について

低学年のころよく遊んだブランコ。友だちと仲直りがしたくて勇気を出して「ごめんね」と言えた学校の帰り道。笑いの絶えないいつもの教室。普段何気なく過ごしている場所にも、一人ひとりの思いがつまっています。本題材は、普段何気なく過ごしている場所の中から思いがつまった場所を選び、その思いが伝わるように工夫して絵に表す題材です。「大切な場所」を探すことで自分の思いが気付いてほしい、そしてその思いが伝わるように画面構成や表し方を工夫することで造形的な思考力を高めたいと願い、題材を設定しました。

指導の要諦

① 思いが伝わる視点にこだわる
大切にしたい思いを伝えるためには、視点の取り方が重要になってきます。

Aさんは五年間通り続けてきた学校の昇降口を選びました。導入の後、昇降口のどの場所に焦点を当てるといいのか考え始めました。下駄箱から廊下の階段を見上げたような視点にしようか、昇降口に入る瞬間に見える景色にしようか、はたまた二階に上がる階段から昇降口を見下ろすように表そうかなど、時間をかけてしゃがんだり見上げたりして思いの伝わる視点にこだわりました。



Bさんは幼稚園のときよくどろ団子づくりをして遊んでいた場所を表すことにしました。表したいイメージに合うように、当時使っていたようなろやバケツ、集めた土の配置を考え、その手前に、どろ団子を両手に乗せた自分の姿を表すことにしました。どのようにしたら両手で包んでいるように見えるか何度もためし、となりで活動する友だちに、折り紙をどろ団子の大きさに丸めて両手で軽く包むように持ってもらい、それを参考にかくことにしました。

② イメージに合う表し方にこだわる
描画材の使い方など、どのように

表すかによっても、伝わり方が大きく変わってきます。

Cさんはいつも通っている体操クラブの、玄関の扉を開けた時に見える器具の質感にこだわりました。「体操で使う器具は一つひとつ質感が違うので、かき分けることにこだわりました。跳び箱は木の感じが出るように、バスでかいた上から絵の具を塗って、パチックで表しました。平均台はいくつかのパーツに分けて考え、重なりのあるところを別の紙にかいて、切って貼ることにしました。マットは、毛羽立つ感じを出すために歯ブラシでこすったり点を打ったりして表しました。」と題材のふり





かえりに綴っています。

Dさんは、強調したい部分とそれ以外の部分の表し方を変え、絵を見た時の印象にこだわりました。玄関の扉とノブを握る自分の腕ははっきりと見えるようにパスで、扉の外の様子は水彩絵の具で淡く表し、自然に手前の扉と腕へ視線が向かうようにこだわりました。

この題材で大切にすること

生活の絵は、自己理解・自己表現を深めるために行うものだと考えています。本題材では、「大切な場所」を探すことが自分の思いを見つめることになり、友だちに見せることが思いを伝えることになると捉えました。

自分の思いに気付いた子どもは、自然にそれが伝わるような表し方を模索します。一人ひとりの中に答えがある造形学習だからこそ、一人ひ

とり納得できるように模索することが重要なことだと捉えています。今後も、子ども一人ひとりが自分の思いを見つめ、自分の表現にこだわることができるように、支えていきたいと思えます。



指導計画	
時間	8時間
領域	A表現(2)
材料・用具	画用紙、水彩絵の具、コンテ、パス、色鉛筆、鉛筆、ティッシュ
学習目標	いつも過ごしている場所の中から「思いが詰まった場所」を選び、その思いが伝わるように、視点の選び方や描画材の選択・扱いなどを工夫して絵に表す。
主な学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 「思いが詰まった場所」を選ぶ。 ● 思いが伝わるような視点を探す。 ● イメージに合うように、描画材や表し方を工夫して表す。
主な評価の観点	<ul style="list-style-type: none"> ● 「思いが詰まった場所」を選び、どのような思いをもって日々を送っているのかを見つめ直し、その時に感じた印象や思いを表すことに取り組んでいる。(造形への関心・意欲・態度) ● 思いが伝わるように、選んだ場所の画面構成や表し方を考えている。(発想や構想の能力) ● 思いが伝わるように、材料や用具の特徴を生かして、表し方を工夫している。(創造的な技能) ● 表したかった思いを感じ取り、意図や工夫を伝え合っている。(鑑賞の能力)

授業実践

学びのフロンティア

中学校 2 年生向き

アニメーションでつなぐ心の輪

絵を動かしてストーリーをつくる

神奈川県厚木市立睦合中学校 森元勇氣

はじめに

日頃から授業を行う中で、こちらの示した題材に対して、生徒たちがそれ以上に驚くような発想力や感性で授業をより豊かなものにしていくと感じています。そして、その豊かな発想力をさらに伸ばすにはどのようなアプローチが可能か考えた末、ひとつの題材に行きつきました。それは、一枚の絵を動かすと、どのように動くかを考えるアニメーション題材です。

以前、アニメーション授業を行う前に、玉虫厨子の異時同図法やゾートロープを題材に動きと時間の表現を行っていました。特にゾートロープは本題材の原型となるもので、自分が描いた絵が動く驚きや感動を味わうことができました。しかし、ゾートロープはその特性上、エンドレスであるということでした。あるとき、そのことに困惑してしまう生徒が「エンドレスではなく、この先の

ストーリーを考えたい」と言ってきたことがあり、それがきっかけとなり本題材がはじまりました。

しかし、どうせ行うなら、一人だけで終わるものではなく、コマをつなげることができるアニメーションの特性を活用し、隣り合う人同士つなげることができたら…、と考え本題材がはじまりました。

本実践の前行ったこと

アニメーションの授業を行う前に、はじめに行ったことは、いきなりコマ絵を描くのではなく、抽象的な形を見てこれが何に見えるかという「見立て」の発想を広げる練習を行いました。そして、それを一コマ目とした簡単な四コママンガを制作し、ストーリー展開や描写の面白さを高める機会としました。それは、その後のアニメーションにおける発想力やストーリー展開における見通す力を身につけるためです。『ルビンの



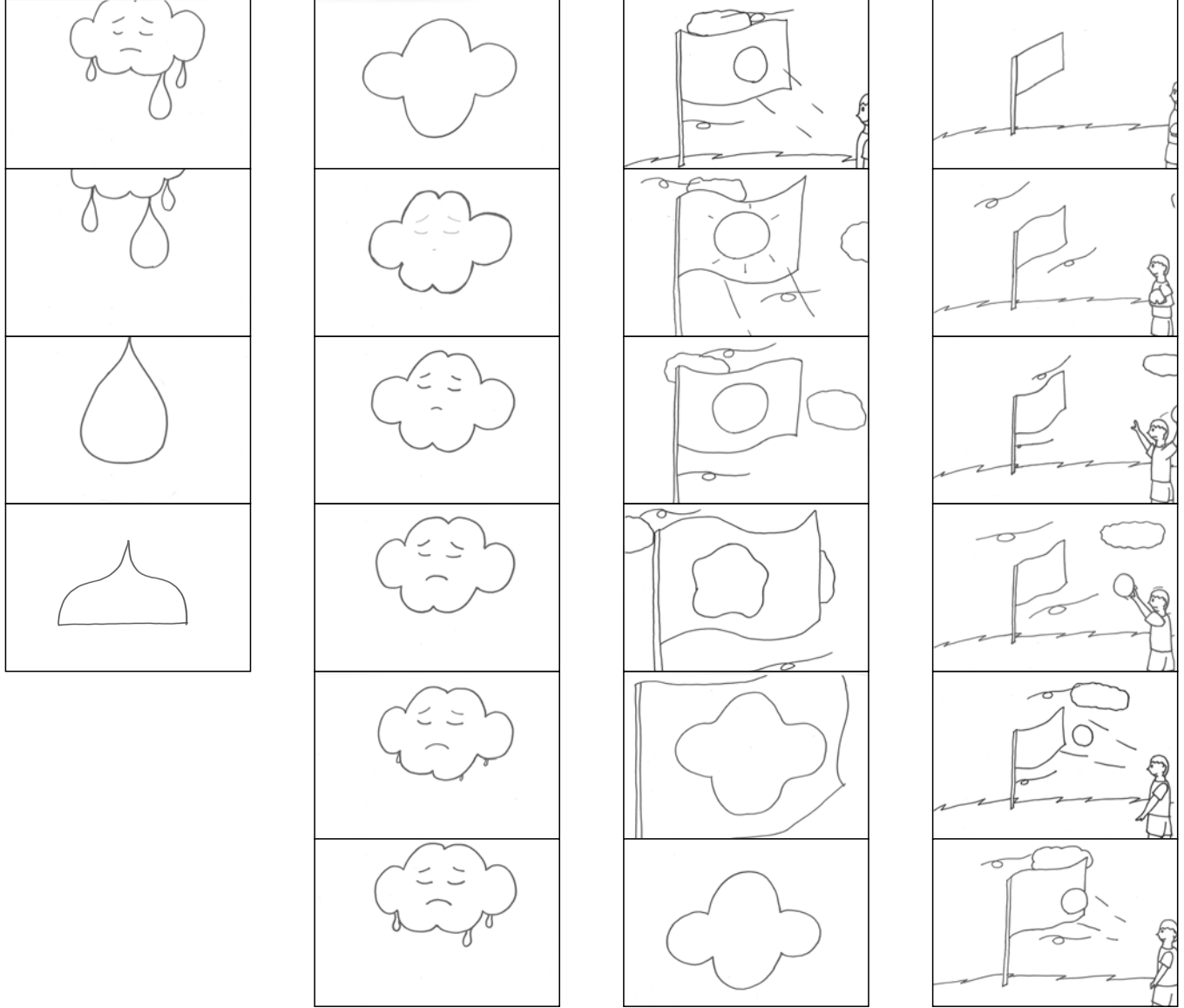
壺』にも代表されるように、黒い部分を見るのか、白い部分を見るのかで形や見え方が大きく変わることを実感させ、繰り返し同様の練習を行い、次に、その見立てを活用し、四コママンガに挑戦し、一コマ目に抽象的な図をどのように見立て、それが二コマ目以降どう展開されるのかを考え、構成力と見通す力をつける機会としました。それらの練習を経て、ようやくアニメーションに取り掛かりました。

授業実践

導入にあたり、鉄拳のアニメー

ションを鑑賞し、動きの変化や描写など使われている技法を観察、研究しました。そして、班ごとに気づいた技法や動きについて発表し合うなど、どのような効果があったのかを全員の共通理解としました。

そして、いよいよ本番。一人一セットクリアファイルを配り、その中に入っている一コマ目と最後のコマの抽象的な図形を基に、その間の部分を描いていきます。ひとり十コマとしましたが、どうしても細かくなってしまう生徒には、コマを増やすことも行いました。こちらで用意したのはじめと最後の指定した図形は、その前後の人と同じで、それぞれ描いていくことで、隣り合うアニメーションがつながり、クラスで一つの作品が仕上がります。さらに、クラス同士をつなげ、学年でひとつのアニメーションにもなります。ここには、前後の人との相談や構成を工夫するなど、今まで行ってきた練習が生かされます。



指導計画	
時間	10 時間
領域	A表現 (1) (3) B鑑賞
材料・用具	クリアファイル A4 コピー用紙 ネームペン カラーペン (グレー)
学習目標	抽象的な形に関心をもち、造形的な美しさや効果を生かして動きの変化を表現するとともに、他者とのつながりや創造的な表現の工夫などを感じ取り味わう。
主な学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 題材を理解し、構想を練る。 ● 動きの変化や展開を意識しながら表現する。 ● 自他と、つながったひとつの作品を鑑賞する。
主な評価の観点	<ul style="list-style-type: none"> ● 抽象的な形態の特徴や美しさに興味をもち、主体的に表現しようとしている (美術への関心・意欲・態度) ● 抽象的な形態からイメージを膨らませたことを基に主題を生み出している (発想や構想の能力) ● ストーリー展開に応じた動きにあった表現方法を工夫し、主題を見つめながら創造的に表現している (創造的な技能) ● 互いの作品のよさや美しさを見つめ、それぞれの作品同士をつなげる中で、主題や表現の工夫などを認め合い、価値意識をもって味わっている (鑑賞の能力)

描いた原画を学校に設置されているコピー機のページスキャン機能を活用し、トータル一五〇枚ほどの原画をデータ化し、パソコンで動画にしていきます。いよいよ鑑賞会一枚一枚つながっている描いた絵に命が吹き込まれる瞬間です。プロジェクターに映し出された動く作品を見て、みんな一様に感嘆の声があげられました。自分の作品が出るまで指折りかぞえている生徒や動きに感激している生徒など様々な姿が見られました。

おわりに

本題材は共同制作として位置づけたものです。自分だけで制作した作品はそれ自体、自立しうるものではありますが、それが隣り合う仲間とつなげることで一つの作品として見ることができ、さらにクラスの垣根を越えて、一つになることは今までの

にない感動と驚きがあったようです。自分の作品がなかったら、決して完成しないことや、同じ目的に向かって、アイデアを共有するなど助け合う場面も見られました。制作することの楽しさだけでなく、お互いが影響し合えることの喜びや自己肯定感を感じることができたようです。





その三

城

そぞろみ部とは、そぞろ歩きながら身のまわりのあれやこれやを観察し、暮らしのなかで出合ういろいろな場面を造形的にとらえ直す部活動である。今回のテーマは城。歴史ロマンを感じられる場所として海外からの観光客にも人気のスポットだ。真夏の日差しの中、世界文化遺産にも登録されている姫路城（兵庫県姫路市）を歩きながら特徴的な「形」を探してみた。

そぞろみポイント一
ひしめくキャラクター

城にはたくさんさんのマークがあふれている。お堀の先で出迎える門には表札代わりの大きな紋章。軒下の瓦の小さな円にも一つひとつに造作されている。これらは城の主を知る手掛かりにもなるわけだが、ひとまずその形態を味わうのがそぞろみ部。属性に応じて分類してみた。

- ・草タイプ 葉っぱや花を具体的に模したものから同じ形を組み合わせて抽象化したものまで、最も多くの種類が見つかった。
- ・虫タイプ 種類限定だが出現率は高い。近くで見ると表情は意外にもユーモラス。長く伸びた口先(吻)の表現にも注目。
- ・水タイプ 水玉で構成された巴紋に加えて、隙間を埋めるような波型のモチーフ。木造建築なので、何は

さておき火気厳禁。他にも姫路城ならではのお菊の井戸には姿の見えないゴーストタイプ。随所に隠れたキャラクターを探すのも城歩きの楽しみである。

そぞろみポイント二
戦略的な空間づくり

すぐそこに見えているのに、なかなか中には入れない。狭い道、ヘアピンカーブに上り坂、次々と仕掛けが襲い掛かる。白い壁に穿たれたのぞき窓は敵を迎え撃つための戦略的な形態だ。○△□のフレームの内側から覗けば、風景がそれぞれの形に切り取られてターゲットに狙いを定めやすい。もちろん、今はそこから攻撃される心配もないので安心して鑑賞できる。遠くから眺めれば波打つ瓦の影と相俟って抽象絵画のようだ。まさにシユブレマティスム的造形感覚。進むたびに変化する門の

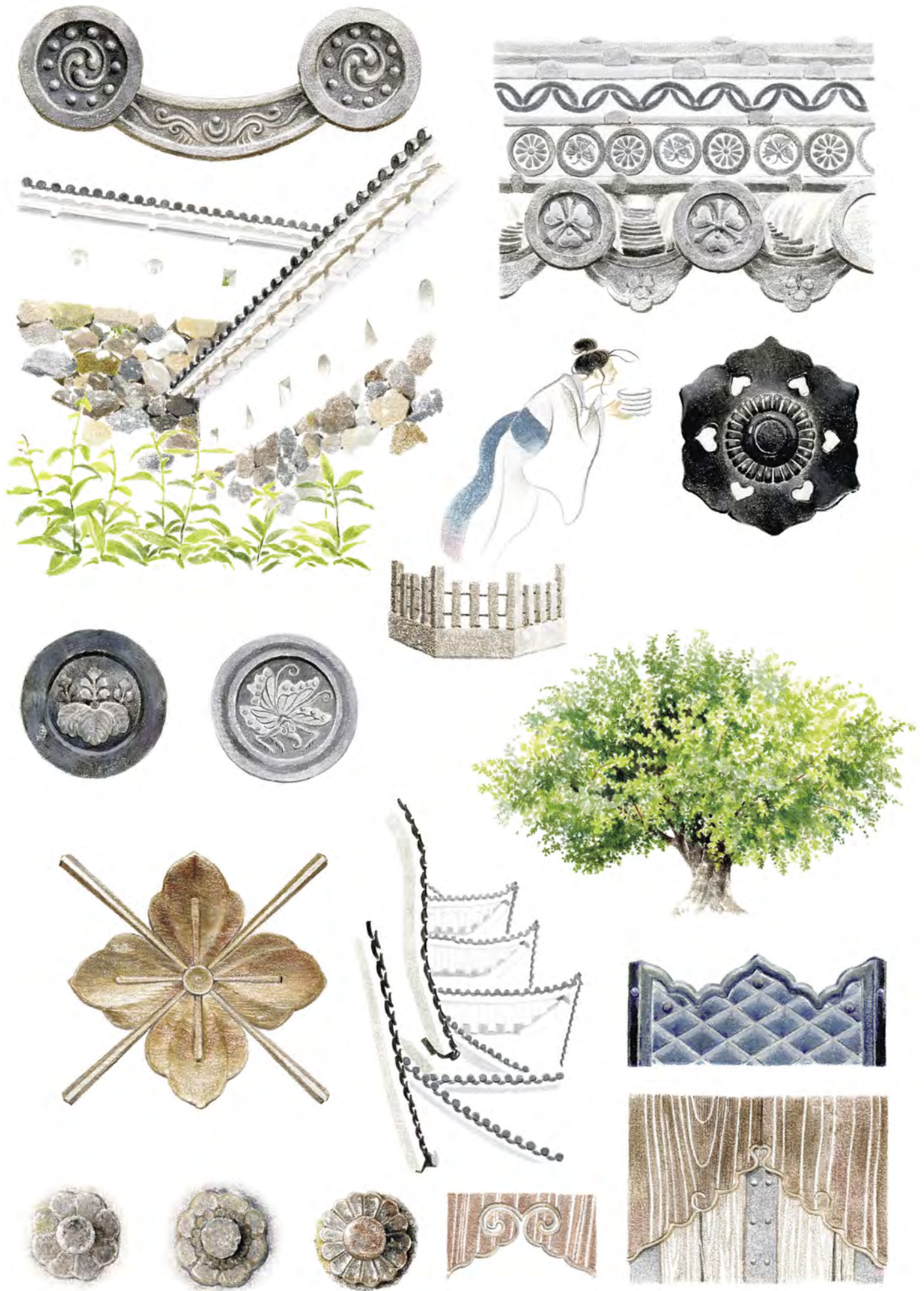
形も要注意。「はの門」を支える柱は木の彫り跡が残る素朴な仕上げ。石垣の間にすっぽりとおさまるようにつくられた「ほの門」にはご丁寧に「頭上注意」の案内板。現代に逆行するバリアフルなデザインがお城らしさを物語る。

そぞろみポイント三
機能を超えた形の妙

ようやく天守に到着。外とは一転して薄暗く、どちらかというと単調だ。そんな中、廊下の壁沿いに手の平より少し大きい板状の構造物が規則正しく並んでいる。縦に十段、真ん中が少しくぼんでいるが、どうやら刀などの武器をかけるためのものらしい。少し上に目をやると、横木から竹ひご状のものが点々と突き出している。話を聞けば、こちらは火縄銃用とのこと。引っ張ればすぐに出勤できる。今となってはそうした

使われ方をすることもなく、純粹な造形物として空間にリズムをもたらしている。回廊をまわりながら上階へ向かうと、少しずつ視界も開けてきた。先ほど歩いた道を見下ろすと、折り重なる屋根瓦がなす稜線が美しい。建造当初の目的は失われても形はそのまま残り続けるが、それらに向けられるまなざしは時代とともに変わっていく。目立たぬように茶色に塗られた配管や木目調の防火設備も、いずれはそんな歴史の一部になっていくのかもしれない。

部長 市川寛也 いちかわひろや (チキスト担当)
筑波大学芸術系助教。妖怪研究者。一九八七年生まれ。まちを歩きながら何が面白いかな場所を探し出し、その土地に固有の物語をつくる「妖怪採集」を各地で実践している。
副部長 danny だにー (イラスト担当)
イラストレーター。一九八七年生まれ。京都精華大学卒業後、イラストレーターとして、書籍、web、広告などの媒体で活動中。色鉛筆で自然や日常の風景を描く。





創造の

つばさを広げて

Vol. 2

こども美術館 スカイミュージアムの取組み

わたしの青の時代、バラ色の時代

その日のこども美術館は、子どもたちに交じって、制服姿の中学生や年配の方、カップルや一人で来た方など、様々な人であふれていました。ファシリテーター役の学生も一緒になって、楽しそうに言葉を交わしています。子どもと来場した保護者の方も、いつものように見守るだけでなく、一緒になって活動を楽しんでいました。

今回ご紹介するのは「わたしの青の時代、バラ色の時代」。あべのハルカス美術館で行われた「ピカソ、天才の秘密」の関連ワークショップで、あべのハルカス美術館より、誰でも参加できる形で実施できなにか、と声を掛けていただき実現したものです。

来場者は、はがき大の画用紙に、クレヨンやコンテ、色紙やお花紙を使って絵をかきます。黙々とかいてもよいのですが、展示会を見た感想や、その日の予定、普段どのように過ごしているのかなど、来場者同士で自由におしゃべりをしながら手や指を動かすことを大切にしました。もちろん、何枚かいても構いません。最初は戸惑っていた方も、他の来場者や、活動を説明するファシリテーターの様子（ファシリテーターは、活動を促すために絵をかきながら声をかけていました）を見ているうちに、用具や材料を持ち、手を動かし始めます。そして気がつけば、皆さん夢中になって表現していました。





作品ができると「これは青の時代かな」「こっちは〇〇色の時代かな」と分類したりタイトルをつけたりしながら、またおしゃべりをします。

つくった作品は壁に貼ったり、写真に撮ってプロジェクターで投影したりして、他の方にも見てもらえるようにしました。みんなで一緒に作品を見ながら「どの時代なのかな」「どんなことを思っただけかな」と考える時間は、知らない人同士の距離を、ほんの少し近づけることができたような気がします。

ピカソが、唯一無二の自由で多彩な表現で作品をつくり続けることができたのは、かいたりつくったりすること自体を楽しんでいたからではないでしょうか。その喜びが次の表現へとつながっていった結果、数々の作品が生まれたのかもしれない。

来場者の中には、絵をかくのが苦手だという方や、何年も絵をかいていないという方がたくさんいました。しかし、いろいろな線や形、色を組み合わせてできた作品は、どれもその人にしかつくりだせない、まさに「わたし」の作品です。

今回の取組みを通して、そうした「わたし」の表現をありのままに認め合うことができるのが図画工作・美術のよさであり、こども美術館で伝えるべきことだと、改めて感じるようになりました。

今後の予定

「紙がへんしん 紙でへんしん」

十二月十、十一、十七、十八日(二十三日より展覧会も行います)

「絵で育む 絵が育む」(東山明「こどもの絵の発達と道筋の世界」)

二〇一七年一月十六日～二十二日

詳しくは <http://kodomo-sky.jp/> をご覧ください。

こども美術館 スカイミュージアム
〒545-6027 大阪市阿倍野区阿倍野筋1-4-3 あべのハルカス27階
TEL・FAX 06-6690-0907 E-Mail info@kodomo-sky.jp



「設場」 「定の」

絵を描く場づくり編

文
名達英詔

北海道教育大学 教授

イラスト

Luis Mendo

視線と身体の動きに着目する

子どもは小さな絵に没頭したり、全身を動かして描いたり様々な描き方で絵を描くことに夢中になります。また、その構えも座ったり立ったり、壁や黒板に対面したりと様々です。絵を描くことは、身体を使い、画面や材料、用具と働きかけ合いながら物事を探究する経験です。この経験を豊かにするために、今回は子どもが絵を描く姿に着目して活動の場づくりを考えたいと思います。

まず、椅子に座り、机に向かっている子についてイメージしてみましょう。体

はやや固定され、視線は画面に近いところから見下ろし、視界は焦点化されやすくなります。絵を描く動きは、肘や手首、指を中心に水平方向に軌跡を描く範囲に概ねおさまります。こうした構えは小さな用の紙や端紙などに細かく集中して描くときや、手先で紙の置き方を試しながら描くときなどに向いています。

一方、机や床、壁などに向かって立ったり中腰になったりすれば、画面との距離は取りやすくなり、俯瞰できるようになります。肩や腰、膝や足首など、多くの支点を使い、大きな動きや複雑な動き、移動の動きなどが得られるようになります。

ります。こちらは、長さや大きさのある紙にのびのび描くときや、スタンプ遊び、絵の具遊び、クレヨンのような描画材に体重を乗せて描くときなどに向いています。共同で活動するときにも良いでしょう。

絵を描く子どもの姿に着目すると、場の役割が見えてきます。これを手掛かりに、題材のねらいと照らし合わせながら、子どもの活動を促す場づくりを考えてみるのも楽しいことです。



1

126,940,088

文・写真：田野隆太郎



第十四回

新井卓

写真といえばデジカメ、スマホで手軽に撮影するのが当たり前となった現代に、
ダゲレオタイプを表現手段に選んだ写真家。彼がレンズを向ける対象は、
核の遺構であり核に翻弄される人々だ。手間と時間をあえてかけて生み出された数々の作品は、
見る者の心の奥底に何かを呼び覚ます。

二〇一五年は、先の大戦の終結から七十年という節目の年だった。戦時を知る世代が減少することでその記憶の風化を案じたのか、メディアは例年以上に体験者の証言に紙面や時間を割いた。そんな中、ある試みをもった作品が発表された。

『MONUMENTS』は、原爆ドームや第五福竜丸など、核の遺構を撮影した写真集だ。ひとりの若き作家が負の遺産として形骸化してゆくモニュメントに実際に足を運び、捉え直した記録である。著者は、新井卓この連載の撮影を担当している写真家だ。

作品はすべてダゲレオタイプで撮影されている。ダゲレオタイプとは、一八三九年にフランスで開発された最古の写真術のこと。磨きあげた銀板の表面に直接、写像を印画する。ゆえに、複製することも引き伸ばすこともできない。デジタル全盛の今からは考えがつかないほど原始的な技術だ。その反面、当時から「記憶をもった鏡」と言われるほど、その写像は圧倒的な解像度がある。

「作業を見たことがないので半信半疑でした。でも、最初の一枚が運良く写ってくれて。露光不足と現像不足で注意深く見ないと見えない映像でしたけど、もの凄く鮮明で頭を殴られるくらいの衝撃だったのを覚えています。近所の池を撮っただけなんですけど、撮影した内容ではなくて、その映像自体が僕には衝撃的でした」

新井がダゲレオタイプに初挑戦した時の話だ。

写真史には、百六十年前に初めて実用化に成功したと簡単に触れられるだけで、その詳細を知る者もない。だから洋書の文献を取り寄せて研究し、とにかく撮ってみたのだ。

作業は、骨の折れるものだった。まずは業者に銅板を銀メッキ加工してもらおう。できた板を革で研磨。それを木工でつくった暗箱に入れ、感光材として調合したヨウ素などのガスにさらす。撮影後はガスマスクを着用しながら、水銀を熱してその蒸気で現像する。なお、それらすべてを一時間ほどで終えるという制限が

ある。なぜ、彼はこれほどまでに労力がかかるダゲレオタイプをやってみたかと思つたのか？

「何で最初のものにみんな興味がないのか不思議で。人間が初めて映像と出会った瞬間ですよ。十五世紀にカメラが発明されて、ダゲレオタイプにするまでに五百年ほどかかっている。初めて機械的にイメージを定着することに成功したことは、その瞬間、人間の知覚が変わつたということじゃないですか。そのインパクトをどうしても自分で体験する必要があると思つたんです」

新しく何かを体験をしたいという欲求は、誰もがもつ。だが、多くの人は最新の技術に触れることで満足する。彼は反対に、原始の技術を試したいと考える。それが叶えば、自分が受けた衝撃を人にも感じてもらいたいと思う。作品に昇華しないと満足しない。それが作家という人間だろう。

「ダゲレオタイプで何ができるかというと、小さなモニュメントを残すことができるわけです。その機能は、過去の人々が直接体験したことを、自分の身を通して学び直すということ。たとえば、原爆を落とされた場所の石に触るとザラザラして気持ち悪い。原爆体験はないけど、石に触ることで感じる異様さを体験したら、それが重要な記憶の憑代よりしろになるのは誰もがわかると思います。とにかくその人の中に新しい体験として何かが生えなないと意味がない。ダゲレオタイプはモニュメントとしての複製物ではないけど、そういう衝動を刺激する力があると思つているわけです」

モニュメントを実際に見ることができれば、それに越したことはない。多くの人にとってそれが不可能なら、撮影の失敗も多く、手間をかけても一枚の写真しか生みだせないダゲレオタイプに、モニュメントの分身の役割が担えるのではないかと考えた。

なぜならダゲレオタイプは、対象がある場所のその光によって直接封印された映像ゆえ、唯一無二のモノとしての強さがあるからだ。触れた人は感覚を刺激され、記憶の奥底にあったものを思い出す。また、それが忘れられなくなるほどの知覚体験になり得ることもある。これは、対象に足を何度も運び、ダゲレオタイプを習得していく中で新井が言語



化したことだ。

だが、芸術作品は基本的に個人がつくりだすもの。そこには作者のエゴや解釈が入りこむ。彼はそのことも十分に自覚し、「記憶を継承する」というよりも、むしろ感覚的なものを伝えたい。そのものの背後に何か大事な記憶があるということ、ダゲレオタイプというモノでアビールしたい」とモチベーションを語る。

要は、ある理念をプロパガンダするために写真を利用するわけではなく、その対象が宿している揺るぎのない何かを、写真を撮ることで見出したということだ。それは、写真学校の学生時代、彼がある作品の前に感じたインパクトに近い。

「同時代の作品は薄っぺらく見えて、興味がなかったんです。それに比べて東松さんの写真を見ると、凄くソリッドで。当時、社会的な問題に関心がなかったけど、それでも作品の背後にある沖繩や長崎というイメージだけを見ても、何か感じるんですよね。自分が無意識のうちに抱えているものが刺激されるっていうか。どうしたらこれほどの作品が撮れるんだろうかと悶々としていました」

新井は、一九五〇年代にデビューした作家に影響を受けた。ニューヨークの路上でさまざまな人をスナップしたゲイリー・ウイノグラッド。そして、沖繩や原爆被害にあった長崎の人々を撮った東松照明。

彼らの写真には、写された風景の中で生きる人々のいわば骨太な人間性のようなものが滲みでていた。通り一遍の主張だけではない、その表面を見つづけることで背後にある大事な何かが浮かびあがってくるような写真。そこには、カメラを構える者の力量が紛れもなく存在していた。

今回の連載、冒頭の肖像写真はスマートフォンで撮影している。撮影後、古めかしい加工ができるアプリを試した。何でもない写真が、ワンタッチで、それらしい写真^①に変化した。これには正直驚かされた。今後も技術は進化しつづけるわけで、デジタル写真にボケや擦れなどのニュアンスを加えて銀板に印刷すれば、完成物としてはダゲレオタイプと差異がない状況がでてくるだろう。であるならば、逆説的に考えてみたい。カメラと完成写真。その両者を省いたら写真には何が残るのだろうか？ そこには、撮る^②という行為が残る。『MONUMENTS』により木村伊兵衛写真賞という名誉ある賞を受けた今、ダゲレオタイプ撮影において彼の右にでるものはいない。だが、これまで彼はダゲレオタイプをしばしば脇にやり、自分が撮るべきものは何なのかを考えたことに、もつとも時間を費やしてきたのかもしれない。

ダゲレオタイプを手にして数年、新井は湖や滝といった自然をモ

チーフにしていた。正直、まだ極めるべき対象に出会っていなかったといえる。そんな彼に転機を与えたのが、『100 SUNS』という写真集だった。そこには、アメリカ人写真家が核実験の現場に従軍しながら撮った、爆発の瞬間が収められていた。

「この世の終わりの映像ですよ。自分が生まれる前に、こういうものが何千発も出現したことの事実が打ちのめされました。怖いというよりも、アートを思考する人間としては凄く畏怖を感じるんです。こんなものを自分はつくることができない。倒錯していますけど、アーティストは、そういう欲望があるんです。でも、これは当然超えられるわけではないし、超えてはいけない」

原子爆弾が爆発し、太陽のように大きく輝く。その足元で、兵士たちが実験の成功に狂喜している。衝撃と同時に、核兵器を創造した物理学者に嫉妬も覚えた。それが世界を破壊させるものでも、人がものをつくりだすこと^③の深淵に思いが至るのは、作家ならば当然のことなのだろう。

作家は、無から何かを生み出すわけだから、欲望がなければ何もなし得ない。ダゲレオタイプを掴ませた新井の欲望は、核という新しいテーマを掘り始めた。まずは、第五福竜丸の乗組員の話聞き、原発労働者の書籍を開いた。その矢先、東日本大震災が起こり、福島第一原発が爆発したのだ。

原爆に隠れていた原発。その脆さが一挙に露呈し、身に降りかかったことで自分自身の問題として捉えることができる。彼は被爆した百合や桜、汚染地域から避難する親子など、撮るべきものを見極めながら撮影していった。そして、『100 SUNS』にもあったアメリカ初の核実験場にもたどり着いた。

旅の記録は四年に及んだ。特筆したいのは、それが政治的なモチーフを扱いながらも、人を扇動するような安易な物語に終始していないことだ。作品には、見る者に新たな認識を静かに覚醒させてくれる包容力がある。そう結実できた理由は、彼自身も核の存在の上に営みを重ねてきた人間のひとりなのだ、ということ

を常に意識していたからではないか。悲惨な状況に置かれている人や遺構を前にした彼の脇にあったのは、やはりダゲレオタイプだった。一日一枚を撮り終えるのがやつとで融通の利かないこの伴走者が、核を告発することに勇みたつ彼を沈め、自省を促したのかもしれない。その結果、見ることも欲望と、人に冷静に見せていくことの同居が成立したのだと思う。

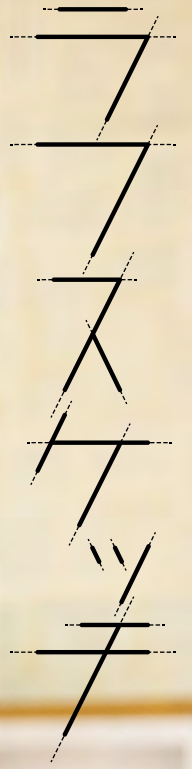
この世に一枚しか存在しない写真。それに触れる人の数は、メディア報道を目にする人とは雲泥の差だろう。しかし、数ではないと思う。ひとりの人がダゲレオタイプの前に立つこ

とで、その人の中に新たな経験が深くゆつくりと芽生えていくことの意味。それは、電源を切れればすぐに消える情報とはちがうのだ。

私も、小さなモニュメント^④に出会ったひとりだ。そこで強く意識したのは、唯一の核被爆国でありながらもアメリカの核の傘下に甘んじ、その平和利用を謳った原発を爆発させたのに再稼働を容認してしまう、そんな矛盾を抱える日本人のひとりであること。新井の試みは届いたのだと思う。それは、やはり写真が、背後にある大事な何か^⑤を感じさせてくれるものだったからだ。

新井卓 あらい・たかし

一九七八年 神奈川県生まれ 写真黎明期の技法・ダゲレオタイプを独自に習得し制作活動を展開している。これまで、ポストン美術館、東京国立近代美術館ほか多数の展覧会に参加。二〇一六年に第四十一回木村伊兵衛写真賞および日本写真協会賞新人賞を受賞した。



図画工作や美術を通じた学びを生かすと、

どんな見え方が広がってどんな将来が描けるでしょうか。

作品制作に止まらず、アートパフォーマンスなど多彩な活動に取り組む

長野県軽井沢高校美術部（通称カルビ）の部長にお話を聞きました。



長野県軽井沢高等学校

清水未悠さん

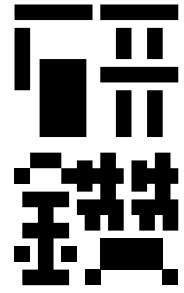
何かをつくりあげる時に大切なことは、
人との関わりや信頼関係。

入部して初めてアートパフォーマンスをやることになった時、美術部なのに何でこんなことするの？と嫌で仕方ありませんでした。でも地域のイベントで発表すると、想像以上の手ごたえを感じたんです。私が嫌だと感じたのは、観客のいない部室で練習していたからなんですね。それからは個人で描いた作品も含めて、自分の表現を多くの人に見てもらうことが楽しくなりました。

部長となった今では、パフォーマンスのシナリオや演出も担当しています。そこでは、例えばバレエが得意な部員の提案でその動きを取り入れたり、何気ない一言でもある部員が

言うとなぜか面白くなる、そんなキャラクターを生かしたシナリオをつくることができたり。私は何でも一人で抱え込んでしまいがちだけれど、部員みんなのおかげで得意な人に任せるといえることができるようになりました。

卒業後は美大のデザイン科へ進学を希望しています。それには活動の中でチラシやポスターをデザインした経験が影響していると思います。カルビに入ってから、何かをつくりあげる時は人との関わりや信頼関係が大切だと実感しました。もともと私はコミュニケーションが苦手なので、この活動がなければデザイン科に進んでも自己満足なものばかりつくっていたと思います。この経験は将来どんな仕事に就いても生かすことができそうだと感じています。



会津造形サークル みしらず会

教師同士で指導力を高める 自主サークル

福島県下には、福島、いわき、会津、郡山各地区に造形サークルがある。これらは大学で同じ先生に学んだ美術教師らによって、県内の造形教育の充実をはかるべくそれぞれの赴任地で設立されたもの。会津造形サークル・みしらず会は、平成八年に発足し、今年で二十年を迎える。

造形活動のすそ野を広げるのは参加者それぞれ 細く長く活動을 続けて学びの場となる

サークル名は会津の名産・みしらず柿が「身の程を知らずに」大きくなる様にあやかっ、自分たちも大きくなるようにとの願いが込められている。

普段の活動は月に一回の定例会。参加者が自分の実践を持ちよりお互いに協議をする。特に発足当時からメンバーは、教科書題材をアレンジして新しい材料を試みたり、導入のしかたを変えてみたりと意欲的な活動

をみせる。こうした新しい試みがお互いの刺激となる。サークルの参加者は小学校の先生を中心に十名前後で、ざっくばらんな雰囲気。派手さや目新しさよりも、気軽に参加してもらえることを大切にしている。

四サークルが集う連合大会

年に二回は、県内の四サークルが集まって連合大会が開催さ

みしらず会から 造形活動を盛り上げる

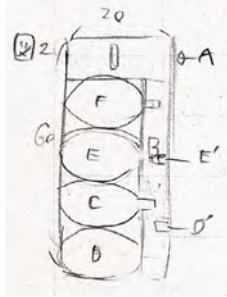
今でも発足当時からメンバーが中心で、年齢層は四、五十歳代が中心。会津で芽生えた造形活動の萌芽を絶やしてはならないと、若い人たちにつなげていくことを意識し始めている。ただ、新しい参加者と長年の参加者とは、求める内容のレベルに差が出てしまい、ひとつの会

れる。連合大会となると、四団体のメンバーに加え、他県からの参加もある。主催はもち回りで、みしらず会の担当では、実践紹介や講演会など、理論的に勉強する内容を意識するという。最近では、教科調査官の東良雅人氏を招き講演会を開いた。簡単に会うことのできない教科調査官の話に近い距離で聞けるとあって、大変好評を得たという。

としてまとめる難しさもあり世代交代はうまく進まない。それでも、細く長く、地道にサークル活動を続けていくことが何よりも大切だと考えている。参加者それぞれが、みしらず会で学んだことを赴任した先々に広めることで、造形活動のすそ野も広がっていかれば、と考えているのだ。みしらず会は、そのために参加者自らが勉強する場である。



photo: Yuka Ikenoya (YUKAI)



中学3年
葉の飾り棚【彩色・木・水性ニス／48×20×12cm】
「美術2・3下」P.41掲載

生徒作品解説 私の見方

この題材は、ポプラ加工材（20cm×60cm×1cm）の一枚の板から、私たちの生活に潤いを与えるものや、心のこもった世界に「ただけの」工芸作品を制作するものです。工芸作品では、ただ単につくりたいものをつくるというだけでなく、自分のつくったものをだれに使用してもらいたいのかということを考えたいという作品のイメージを具体化させていくことが大切です。技術的には「曲げる、組む、重ねる」などといった、仕組みを考えて設計し、つくるものに応じて木取りを考える必要があります。

一枚の板からつくりあげた、世界に一つしかない「leaf shelf 葉の飾り棚」と命名されたこの作品は、見た目の楽しさを重視しつつ、実用性を兼ねたオブジェとしても楽しめる工芸作品です。

造形的な美しさや楽しさの中に、少し背の高いものを置けるようにと、葉と葉の間を高く設計されています。垂直に伸びる幹の部分に接合された葉は、綺麗な色で塗り分けられ、仕上げのニス塗装によつてPOPな感じを際立たせています。この棚に何を飾るのかを想像したただで楽しくなりそうですね。

みなさんはどう感じますか。

文 お茶の水女子大学附属中学校 副校長 小泉 薫

形 forme No. 311-2016

日文教育資料【図画工作・美術】

平成28年(2016年)11月30日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社

〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5

TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33328

日本文教出版 株式会社

<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690